

近代日本の災害史料研究プロジェクト

プロジェクト代表者：文学部・教授 山崎 有恒

【研究計画の概要】

(1) プロジェクトの概要について

災害の歴史について知ることは、近未来の防災計画を立てる上で重要な要素となることは言うまでもない。そしてそのためには日本各地（そして日本の植民地だった海外各所）に残る災害関係の史料を調査し、歴史学的な調査研究を行うことが極めて重要となる。しかしながら長年歴史学の世界でこうしたテーマは等閑視され、ないしは自分たちの専門とは別の専門科学が取り扱うべきテーマと考えられてきたことにより、基礎的な調査すらもがまともに行われてこなかった。

本プロジェクトは「歴史から学ぶ」を合言葉に、災害史料、特に明治維新以降のいわゆる近現代史料を中心に調査研究しようとするものである。また実際に史料の具体的中身に検討を及ぼすよりもむしろ、史料情報（どこにどのような災害に関する史料が保存されていて、それはどのような内容であるかといった書誌情報）を広範囲に収集して、今後の災害史研究のための基礎データを収集・公開することに主眼を置いている。

なぜ近現代を対象とするのかについては、それが人間と災害との関係性を大きく転換させ、現代の防災思想を生み出した時代だからである。近世以前の人間は基本的には災害・自然との共生の中で生活を営んでおり、たとえば鴨川周辺に見られる非連続堤と河原にみられるごとく、完全に災害を封じ込めるのではなく、その逃げ道を構築することで最小限の被害にとどめるといった歴史的知恵を構築してきた。これは火災に関しても同様で、すぐに再建可能な構造の住宅家屋で街を構成することにより、いったん火事が発生しても、それが大家に発展することを防ぐ「破壊消防」を展開することができた。しかし近現代に入り、科学技術すなわち「文明」に対する過度の信頼から、コンクリートの連続堤や重厚な構造の家屋が積極的に導入され、結果的に災害時の被害を拡大している部分が少なくない。こうした「転換」こそが現代の防災思想の根底にあり、それはそれでももちろんすぐれた成果を生み出したことは間違いないものの、同時に人々の災害に対する意識を変え、新たな問題を惹起している。こうした「転換」の中で失われていった、近世以前の防災思想の良さをどのように拾い出し、未来の防災計画に寄与していくかを考えるため、本プロジェクトは近現代の災害史料を対象としている。

(2) プロジェクト研究の成果

2016年度については、京都では京都市歴史資料館所蔵の町文書、個人文書を中心に調査を進め、出張調査としてはまずは国立国会図書館憲政資料室所蔵の個人文書を中心に災害史料の現状を調査した。さらに今年度は横浜開港資料館、愛知大学図書館、横浜市立中央図書館、札幌市立図書館、北海道大学図書館、樺太連盟事務室所蔵文書、北海道立文書館などでの調査を行った。

京都での調査に関しては、若手講師や院生たちと災害史料、特に崩し字の読解を行う研究会を立ち上げ、今年度は8回の研究会を開催した。京都市歴史資料館所蔵文書の多くが、難解な崩し字で書かれており、それを読解していくことで多くの若手が読解技術を向上させたのは今

年度の大きな成果であったとあってよからう。

また出張調査においては、国会図書館憲政資料室の個人文書を中心に研究を進めたが、これまで政治史の素材としてしか利用価値を見出されてこなかったこれらの史料群に多くの災害史料が含まれ、そうした視点からの研究が十分に推進可能であることを認知しえたのは大きな収穫であった。また斎藤実文書に代表されるように、日本の各植民地における防災の問題が、ある種内地における経験の一つの結論として展開され、それは現地行政の中で様々な、いわゆる「文明の衝突」を引き起こしながらも、着実に推進されていったことが分かったのも大きな成果であった。こうした植民地における防災は当該分野において全くと言ってよいほど取り上げられたことがなかったが、度重なる災害との戦いの中で歴史が大きく動いた点が多々あり、これからはこうした視点での研究も積み上げられて行かなければならないと考えさせられた。

(3) 次年度に向けた課題

2016年度の研究活動により浮かび上がってきたいくつかの重点的テーマについて、次年度も推進していく予定である。具体的には①京都における災害史料の調査研究、資料集の出版、史料情報データベース化と公開、②国内外の史資料館へ出張調査、特に災害史料の保存状況とそのデータベース化、の2点を中心に進めていきたいと思う。